

EBC(Evidence-based Control)研究会ワークショップ 2013のご案内

日時：2013年9月18日(水) 12:30~17:30, 受付開始12:00.

場所：クミアイ化学工業株式会社 本社 大会議室(東京都台東区池之端1丁目4-26)

<http://www.kumiai-chem.co.jp/company/access.html> を参照下さい。東京メトロ千代田線利用：湯島駅から徒歩5分、東京メトロ銀座線利用：上野広小路駅から徒歩10分、JR利用：上野駅または御徒町駅から徒歩12分。

参加費：2,000円(ただし、学生は1,000円)を受付時に徴収させていただきます。

参加申し込み：下記事務局に8月27日(火)までに電子メールにてお願いします。申し込みをされた方には講演要旨をダウンロード(PDF)できる方法を電子メールでご案内しますので、印刷して当日ご持参ください。なお、今回は会場規模の関係で、事前申し込みの段階で定員になり次第締め切らせて頂きます。

懇親会(会費4,000円程度)：上野駅近辺で18:00より予定しております。参加をご希望の方は申し込み時にお申し出下さい(定員になり次第締め切らせて頂きます)。なお、会費は懇親会場で徴収させていただきます。

プログラム

12:30

開会

12:35~13:20

ネギ葉枯病菌の伝染環解明と伝染環に基づいた防除法の確立

三澤 知央(北海道立総合研究機構 道南農業試験場)

近年、根深ネギ栽培において葉枯病が全国的に発生しています。そこで、本病の病原菌の伝染環を圃場観察、菌の分離、孢子トラップという誰でも実施できる手法を用いて解明しました。また、解明された伝染環に基づいて、薬剤散布を中心とした防除法を確立しましたので紹介します。

13:20~14:05

イネ墨黒穂病による玄米汚損を軽減する技術体系構築のためのエビデンスメイク

石川 浩司(新潟県農業総合研究所作物研究センター)

イネ墨黒穂病は農産物検査で玄米の汚損が1粒でも確認されると規格外となり、発生した場合の被害が大きい病害です。検査基準が厳しいため、これさえ実施すれば大丈夫といった技術が無く、複数の技術を組み合わせる必要があります。そこで、玄米汚損を軽減する技術体系を構築するために行った薬剤の防除効果や圃場における発生量と玄米汚損の関係などの試験事例を紹介します。

14:05~14:55

フェロモントラップ誘殺数を根拠とした斑点米カメムシの発生予察

高橋 明彦(中央農研北陸研究センター)

斑点米カメムシ類は低密度で被害を発生させ、収穫後でなければ被害を確認できないため、防除対策としては予防的、画一的な薬剤散布が主体となっています。過剰な防除を避け、発生量に応じた防除対応を実現するための発生予察、被害予測の試みについて紹介します。

一休憩

15:10~15:55

新規殺菌剤ピリベンカルブの特長と効果的な使い方

貴田 健一(クミアイ化学工業株式会社 研究開発部)

ピリベンカルブは幅広い防除スペクトラムを有したベンジルカーバメート系の新規殺菌剤です。本剤は果樹・野菜類の灰色かび病や菌核病、灰星病などに対して優れた防除効果を発揮します。今回は、本剤の特長とこれまでに得られたエビデンスに基づいた効果的な使い方について紹介します。

15:55~16:40

病害防除の科学的根拠を創出するためのデータマイニング

川口 章(岡山県農林水産総合センター農業研究所)

既に蓄積されている膨大なデータから研究目的に合う新たな科学的根拠を創出するための手法である「データマイニング」について、それを用いた植物病害防除研究の実例とともに紹介します。

16:40~17:25

耐性菌対策のための薬剤使用ガイドライン

石井 英夫(殺菌剤耐性菌研究会顧問、農業環境技術研究所)

イネいもち病でMBI-D剤耐性菌に次いで、昨年新たにQoI剤耐性菌が出現し薬効低下を引き起こしました。また、野菜や果樹等でもQoI剤やSDHI剤に対する耐性菌が問題となっています。そこで、更なる周知徹底を図るため、殺菌剤耐性菌研究会が公表しているガイドラインを紹介します。

17:30

閉会

問い合わせ先：研究会事務局 東京農業大学農学部植物病理学研究室 根岸寛光 (e-mail:negishi@nodai.ac.jp)

翌9月19日(木)には、一般社団法人日本植物防疫協会主催のシンポジウム「転機に立つ国内農業と植物防疫の展開方向」(仮課題)が日本教育会館「一ツ橋ホール」(東京都千代田区一ツ橋2-6-2)で開催されます。